

Title	テューダー・ ステュアート前期のイギリス毛織物工業：研究史的考察
Sub Title	The woollen and worsted industry in Tudor and early Stuart England : a historiography
Author	米山, 秀
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1979
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.72, No.4 (1979. 8) ,p.523(119)- 536(132)
JaLC DOI	10.14991/001.19790801-0119
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19790801-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

テューダー・ステュアート前期のイギリス毛織物工業

—研究史的考察—

米 山 秀

本稿はテューダー朝成立から Civil War 直前に至る時期の毛織物工業を対象とする secondary works に関する研究史である。後述の理由から、ほぼ1920年代を画期とし、〔I〕ではそれ以前(以下「初期」と略記)の諸研究の特徴を、〔II〕ではそれとの対比においてそれ以降(以下「後期」と略記)の諸研究の特徴をテーマ別に、〔III〕では狭義の毛織物工業史以外の関連分野について、それぞれ概観する。なお、Printed Sources 自体および地方史雑誌掲載論文は原則として省略されており、またそれら以外でも対象の歴史的な重要性和同時に「初期」と「後期」の対比という観点から〔II〕、〔III〕で選択・設定されたテーマと直接関連し得ないものは省略されているが、同様な観点から有用と思われる諸文献に利用された史料の性格に関しては、できる限り言及することにする。

〔I〕「初期」の研究

19世紀末は毛織物工業史にとっても巨匠達の時代であった。すなわち、Smith〔1〕; James〔2〕; Bur-

nley〔3〕、といった編年史的業績を先駆として、テューダーおよびステュアート期の毛織物工業を初めて本格的歴史研究の対象としたのは、この時期の巨匠達であった。Cunningham〔4〕; Ashley〔5〕; Unwin〔6〕; ditto〔7〕; ditto〔8〕; ditto〔9〕、などがその典型である。

これらの諸業績は、「後期」の諸研究と区別される共通の一般的特徴をもっている。その第一は、Cunningham および Ashley が保護主義に、Unwin が自由主義に傾斜するという相違はあるものの、現実的問題関心を直接歴史研究に反映させようとする共通の態度がみられる点で、まさに彼らにとって 'Elizabeth' は同時に 'Victoria' でもあった。第二は、彼らの研究対象の広範さにあり、そのことは、歴史の多局面に交叉する因果連関の設定を試みること、すなわち毛織物工業をテューダーおよびステュアート期全体の「文化的環境 (cultural environment) (トニー) の内」とらえようとする態度を彼らに可能にさせた。第三に、Cunningham および Ashley は G. Schmoller を、Unwin は K. Bücher を主として媒介として、ドイ

- 注〔1〕 Smith, J., *Chronicon Rusticum-Commercial; or Memoirs of Wool etc. Being a Collection of History and Argument, concerning the Woollen Manufacture and Woollen Trade in General*, 2vols., (1747).
〔2〕 James, J., *History of the Worsted Manufacture in England, from the Earliest Times*, (1857).
〔3〕 Burnley, J., *The History of Wool and Wool Combing*, (1889).
〔4〕 Cunningham, W., *The Growth of English Industry and Commerce*, (1882). [6th ed., 2vols., Vol. II, part 1, (1919)].
〔5〕 Ashley, W. J., *An Introduction to English Economic History and Theory*, (1888), [後に Vol. I in 2pts., Part 1, (1888); Part 2, (1911)] [野村兼太郎訳「英国経済史及び学説」(1932)].
〔6〕 Unwin, G., *Industrial Organization in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*, (1904).
〔7〕 ditto, 'the History of the Cloth Industry in Suffolk', (*V. C. H. Suffolk*, Vol. II. (1907).
〔8〕 ditto, 'The Merchant Adventurers' Company in the Reign of Elizabeth', (1913).
〔9〕 ditto, 'Commerce and Coinage in Shakespeare's England', (1916), [[7]~[9] はいずれも Tawney, R. H., (ed.), *Studies in Economic History: The Collected Papers of George Unwin*, (1927) に所収].

ツ歴史学派の影響下にあり、そのことは程度の差こそあれ、彼らの普遍志向的段階区分や制度・組織史的問題設定（例えば、Cunningham における経済有機体的組織（economic organisms）の盛衰、Unwin における自由意志に基づく団体（voluntary association）の発展など）に現われている。第四に、その利用した史料は、statistical なものより narrative なものに、地方文書より公文書に比重があり、広義の State Papers 類を中心とする法制史料がその典型であった。

これらの諸特徴は、相互に内的関連を有するものであり、この時期をして毛織物研究史上特有の時期としており、Unwin 以降はこうした諸特徴を併せもつ研究は出現しなくなる。この時期がまさにその幕をおろしつつあった時に登場し、それ以前の諸業績を集大成したのが Lipson [10]；ditto [11] という通史的研究であった。

〔Ⅱ〕「後期」の毛織物史研究

1920年代を画期として、毛織物工業史研究は新たな段階を迎えるに至った。「初期」の研究にみられた強烈な現実的問題関心は少なくとも表面からは消失し、歴史の発展に対する a consensus of scepticism（ウィンター）の存在が指摘されるようになった。また同時に、そうした問題関心と適合的關係にあった歴史学派の影響下における普遍志向的段階区分は、史実（料）内限定的な限定的時期区分へと変化した。一方、研究対象の個別化・専門化が進み、史料の利用・批判も進展をみ、地方文書の占める役割が増加し、また史料の統計的処理も盛んになった。これらの諸特徴は、互いに適合的な關係にあり、相互促進的にその傾向は強まっており、「後期」においても最近のもの程その傾向は強くなってきている。

かくして、「後期」の研究は、制度・組織史に傾斜した「初期」の研究のもつ貧困な時系列的歴史像に豊かなダイナミズムを与えることに成功した半面、研究が限定的対象や同質の史料ごとに不均等に進行するた

め、構造的歴史像の形成は困難になってきている。

以下では、この時期最も研究が進展した分野であると同時にこの時期の研究潮流を最も典型的に示している二つの研究分野、すなわち、毛織物輸出趨勢を中心とした外国貿易の分野と生産組織を中心とした地域史研究の分野とを主要対象として、具体的テーマを設定し、「初期」の研究と比較しつつ「後期」の研究成果を概観する。その際、テーマの設定は、上述の理由から当然その対象と同時に、利用されている史料に基づいてなされることになる。

（1）外国貿易

既述のように、毛織物貿易は「後期」に最も研究が進展した分野の一つであるが、「初期」の研究においてもこの分野の研究が存在しなかったわけではなかった。しかし、「初期」の研究においては、その考察対象が貿易特許団体（chartered companies）をめぐる問題に集中していた。例えば、Unwin [8] における問題設定は、イングランドの毛織物貿易の発展に寄与したのは貿易特許団体に代表される規制的要因であったのか、それとも interloper などの非規制的要因であったのか、というものであった。また Lipson [10] においては、毛織物貿易の考察は各貿易特許団体ごとになされており、それらの集合体としてイングランド全体の貿易がとらえられている。これに対し、「後期」においては、主として毛織物輸出関税統計の分析によって解明された毛織物輸出の統計的趨勢を基礎に研究が進められてきている。

①貿易趨勢 イングランドの毛織物輸出趨勢を確定しようとする試みにおいて、「後期」には大きな注目を集めるに至った毛織物輸出関税統計は、「初期」においても既に Schanz [12] によって Henry VIII 期に関するものが作成されていた。しかし、この輸出関税は「初期」の巨匠達からは全く顧みられることなく、むしろ財政史の側面から Scott [13] によってその王室収入に占める割合の大きさが強調されたにすぎなかった。その後 Friis [14] によってステュアート初期

注[10] Lipson, E., *The Economic History of England*, 3 vols., Vol. I: *The Middle Ages*, (1915). [enlarged ed. (1937)]; Vols. II-III: *The Age of Mercantilism*, (1931) [enlarged ed. (1943)].

[11] ditto, *The History of the Woollen and Worsted Industry* (1921).

[12] Schanz, G., *Englische Handelspolitik gegen Ende des Mittelalters, mit besonderer Berücksichtigung des Zeitalters der beiden ersten Tudors, Heinrich VII und Heinrich VIII*, 2 Bde., (1881).

[13] Scott, W. R., *The Constitution and Finance of English, Scottish and Irish Joint Stock Companies to 1720*, (1912).

[14] Friis, A., *Alderman Cockayne's Project and the Cloth Trade*, (1927).

の特定の年度の統計が明らかにされたが、この種の研究が本格化するのは「後期」に入ってからである。まず、Fisher [15] が16世紀全体を通じてのロンドンの3か年平均の統計を、その後 Fisher [16] によってステュアート前期の約半数の年度についてのロンドンの統計が、Ramsey [17] によって Henry VII 期の統計が、それぞれ明らかにされた後、Carus-Wilson & Coleman [18] 及び Gould [19] により 1560 年以前のほぼ全港湾についての毛織物輸出関税統計が作成されるに至った。これら一連の研究は、テューダー前期については全港湾のテューダー後期については3か年平均のロンドンの、ステュアート前期については約半数の年度のロンドンの輸出関税統計を作成するという成果をもって一応の結着をみるに至った。

しかしながら、これらの研究はイングランド全体の毛織物輸出趨勢の解明の試みとしては不十分なものであった。何故なら、まずこれらの研究の大部分はロンドンからの輸出だけしか扱っていないからであり、また関税統計という史料の性格から様々な非合法輸出が反映されていないからである。これらの欠陥を補うのが地方港 (out ports) や interloper・smuggling についての研究である。そうした研究のうち、smuggling ないし interloper を扱った Ramsay [20];

ditto [21]; Willan [22], テューダー前期のロンドンと地方港の輸出シェアの推移を扱った Ramsey [18]; Ruddock [23] といった比較的初期の研究は、Unwin [8] 以来の自由貿易対独占貿易といった問題設定に連なる傾向が強かった。これに対し、Fisher 等のロンドンを中心とする関税統計をもってイングランド全体の貿易趨勢とみることに對する批判を試みた、Stephens [24]; Gould [25]; Stephens [26] などや、Ramsey [17]; Ruddock [23] らの主張を、関税制度の一時的变化との関連で批判した Cobb [27] といった最近の一連の批判的研究においては、議論の焦点が史料処理、とりわけその統計的操作に移行する傾向が強まっている。

毛織物輸出の趨勢を扱った上述の一連の諸研究によって解明された史実は、大別して以下の四点に要約しうる。1) ロンドンを中心としたイングランド全体の傾向として、毛織物輸出は、テューダー前期に未曾有の好況を享受した後、テューダー後期には慢性的不況に陥り、ステュアート前期には激しい数次の不況を伴いながら全体としては回復に向かった。2) 既に14世紀に原料 = wool の輸出国から半製品 = 白地 woollen の輸出国に転化していたイングランドは、ステュアート前期には New Draperies や染色 woollen といった完成品の輸出国に転化しつつあり、上述の貿易変動

- 注[15] Fisher, F. J., 'Commercial Trends and Policy in Sixteenth Century England', (*Ec. H. R.*, Vol. X, 1940). [浅田実訳『16世紀英国貿易の趨勢と政策』, 同訳『16. 7世紀の英国経済』(1971) 所収]。最近、テューダー後期のロンドンの全年度についての統計を、Fisher から個人的に提供された Coleman, D. C., *The Economy of England 1450-1750*, (1977) がグラフ化している。
- [16] Fisher, F. J., 'London's Export Trade in the Early Seventeenth Century', (*Ec. H. R.*, 2nd ser., Vol. III, 1953), [浅田実訳『17世紀前半ロンドンの輸出市場』, 同訳, 前掲書, 所収]。
- [17] Ramsey, P., 'Overseas Trade in the Reign of Henry VII: the Evidence of Customs Accounts', (*Ec. H. R.*, 2nd ser., Vol. VI, 1953).
- [18] Carus-Wilson, E. M., and Coleman, O., *England's Export Trade 1275-1547*, (1963).
- [19] Gould, J. D., *The Great Debasement: Currency and the Economy in Mid-Tudor England*, (1970).
- [20] Ramsay, G. D., 'The Smugglers' Trade: A Neglected Aspect of English Commercial Development', (*T. R. H. S.*, 5th ser., Vol. II, 1952).
- [21] ditto, *English Oversea Trade, During the Centuries of Emergence*, (1959).
- [22] Willan, T. S., *Studies in Elizabethan Foreign Trade*, (1959).
- [23] Ruddock, A., 'London Capitalists and Decline of Southampton in the Early Tudor Period', (*Ec. H. R.*, 2nd ser., Vol. II, 1949).
- [24] Stephens, W. B., 'The Cloth Exports of Provincial Ports, 1600-1640', (*Ec. H. R.*, 2nd ser., Vol. XXII, 1969).
- [25] Gould, J. D., 'Cloth Exports 1600-1640', (*Ec. H. R.*, 2nd ser., Vol. XXIV, 1971).
- [26] Stephens, W. B., *Futher Observation on English Cloth Exports*, (*Ec. H. R.*, 2nd ser., Vol. XXIV, 1971).
- [27] Cobb, H. S., 'Cloth Exports from London and Southampton in the Later Fifteenth and Early Sixteenth Centuries: A Revision', (*Ec. H. R.*, Vol. XXXI, 1978).

の過程は同時に輸出品構成の変化の過程でもあった。

3)これと平行して、輸出市場の重心は、中・東欧から南・西欧へと拡散しつつ移行した。4)テューダー前期の貿易好況期に毛織物輸出のロンドンへの集中が強まった。これに対し、半製品から完成品への移行は地方港においてより急速に進んだ。

これらの史実に対して、以下のような側面から因果連関の設定が試みられている。

②貿易(景気)変動と政策 テューダー期の経済政策は毛織物輸出動向と密接な対応関係を有するとする Fisher [15] が、好況期には自由政策が、不況期には規制政策がとられるとするのに対し、Stone [28]はこれを批判し、テューダー期の政策決定因を毛織物輸出動向の他、対外関係特に戦争やそれに伴う財政問題や autarky 及び paternalism などに求めるべきであると主張している。さらに、Gould [19]; ditto [29] は、テューダー中期の輸出景気の激変が貨幣政策に、86-87 年不況がスペインとの外交関係に、それぞれ起因するいずれも短期的なものであったことを強調している。ステュアート前期については、20 年代不況に関する Friis [14] がある。Unwin [6] によっても Stuart corporation との関連で注目されていた Alderman Cockayne's Project (1614-17) を貿易特許団体間の対立と財政政策の結合としてとらえ、その計画の失敗の余波として 20 年代不況をとらえている。

③不況論争 ステュアート前期の一連の不況論争に関しては、前述の Friis [14] や Gould [30] が 20 年代不況の対応過程での利害対立を、Ashton [31]; ditto [32]; Croft [33] が James I 期の下院の自由

貿易論争を、それぞれ扱っている。また、Notestein [34] に基づき Cooper [35] が、21 年の下院の論争に触れている。これら一連の不況論争に関する研究は、既述の輸出品構成の変化が、自由貿易 対 規制貿易、地方港 対 ロンドンといった多様な利害緊張関係の中で、それらの利害対立と相互促進的に進行していたことを解明している。

④輸出品構成の変化と国際的分業構造 輸出品構成の変化を、イングランド半製品工業→低地地方仕上工業→中欧市場(一部完成品は東欧市場へ)というテューダー前期までに確立された毛織物の国際的分業構造の解体との関連で考察しようとする研究がある。Fisher [16] は、その解体期において、半製品より完成品の方がより広範な市場を潜在的に期待しえた点を強調している。Supple [36] は、大陸市場の需要構造の変化と毛織物生産コストの国際的引下げ競争の結果として輸出品構成の変化を捉えている。

国際的分業構造解体の原因としては、Fisher [16] Supple [36]; Davis [37] などが一様に、アントワープ市場の崩壊やオランダ独立運動や三十年戦争などの一連の政治的過程を重視している。一方、経済的側面に関しては、Fisher [16] が中・東欧市場の飽和を重視するのに対し、Supple [36] は東欧工業の興隆及び大陸毛織物工業へのスペイン産羊毛の供給の増加などを重視している。また、最近 Davis [38] は、テューダー期までの北西欧における海上交通の未発達が内陸交通の要地であるアントワープへの集中をもたらした、という説を主張している。しかし、いずれにしても、これら大陸における状況との実証的照合は不十分であ

注[28] Stone, L., 'State Control in Sixteenth-Century England', (*Ec. H. R.*, Vol. XVIII, 1947).

[29] Gould, J. D., 'The Crisis in Export Trade, 1586-1587', (*Eng. H. R.*, Vol. LXXI, 1956).

[30] Gould, J. D., 'The Trade Depression of the Early 1620's', (*Ec. H. R.*, 2nd ser., Vol. VII, 1954).

[31] Ashton, R., 'The Parliamentary Agitation for Free Trade in the Opening Years of James I', (*P. & P.*, Vol. XXXVIII, 1967).

[32] ditto, 'Jacobean Free Trade Again', (*P. & P.*, Vol. XLIII, 1969).

[33] Croft, P., 'Free Trade and the House of Commons, 1605-6', (*Ec. H. R.*, 2nd ser., Vol. XXVIII, 1975).

[34] Notestein, W., Relf, F. H. & Simpson, H., (eds.), *Commons Debates 1621, 7 vols.*, (1935). この他の同様な史料については Johnson, R. C., 'Parliamentary Diaries of the Early Stuart Period', *B. I. H. R.*, Vol. XLIV, (1971). のリスト参照。

[35] Cooper, J. P., 'Economic Regulation and the Cloth Industry in Seventeenth Century England', (*T. R. H. S.*, 5th ser., Vol. 20, 1969).

[36] Supple, B. E., *Commercial Crisis and Change in England, 1600-1642*, (1959).

[37] Davis, R., 'England in the Mediterranean, 1570-1670', (in, Fisher, F. J., ed., *Essays in the Economic and Social History of Tudor & Stuart England*, 1961).

[38] ditto, 'The Rise of Antwerp and its English Connection, 1406-1510', (in, Coleman, D. C., and John, A. H., (eds.), *Trade, Government and Economy in Pre-Industrial England*, 1976).

るといえるが、旧分業構造解体の直接の契機となったといえる Merchant Adventurers のアントワープ市場からの放逐に関しては、Ramsay [39] が、イギリス・スペイン間の政治的・宗教的対立過程を中心に扱っている。

イギリスのこうした変化の過程に対応する大陸側の状況に関しては、いわゆる地理上の発見と商業革命との因果関係を批判しようとする、Cipolla [40]; Sella [41]; Rapp [42] といった一連の研究や、Wilson [43]; Wee [44]; Houtte [45] などによって、北イタリア完成品工業の衰退や、低地地方工業の構成の逆転 (Worsted→Woollen) や、テューダー中期を画期とするアントワープ仕上工業の盛衰などの史実が明らかにされている。(なお、東欧輸出に関しては Zins [46] が、バルト海沿岸地域における。オランダのイギリス追い上げ過程、特に後者の粗製完成品輸出の衰退過程を、既述の port book を利用して詳細に扱っている)。

⑤貿易特許団体 この分野の研究は、既述のように「初期」においても存在した。Lingelbach [47] や Friis [14] によってなされたその内部組織の考察や、Unwin [8] のように、これを全貿易中の規制的要因の典型としてとらえ、自由貿易的要因と比較したり、国家との関係を考察するものなどが主要な研究視角で

あった。「後期」においても Levant Company の Joint Stock Company から Regulated Company への移行過程を扱った Willan [48], interloper 問題を中心とする Willan [49] や、20年代危機を中心に、対オランダ競争のための自由貿易化の要請と東欧からの輸入品確保のための保護貿易化の要請との緊張関係を扱った Hinton [50] などにも同様な視角が展開されている。しかしながら、当時の貿易特許団体が特定海外市場に対する特定製品の輸出独占権によって成立するものであれば、輸出市場の移動や輸出品構成の変化が解明された現在、諸貿易特許団体相互の関係や比較なども重要な考察課題となる。しかし、Brenner [51] が、貿易ルートにより担い手の社会的性格が相違するという仮説を提出しているものの、この種の研究はまだほとんど進行しておらず、Robert [52] も、単に諸 Companies を並列的に考察しているにすぎない。

⑥成果と課題 以上のように、貿易統計を中心とする一連の研究は様々な側面で成果をあげてきている。また後述するように、依然毛織物生産量や国内需要の趨勢が確定困難である現在、毛織物全体の発展の時系列像の形成はこれらの研究の成果に依存しなくてはならない。しかしまた、これらの研究については以下のような問題点も指摘しうる。

- 注[39] Ramsay, G. D., *The City of London in International Politics at the Accession of Elizabeth Tudor*, (1975).
- [40] Cipolla, C. M., 'The Decline of Italy, the Case of a fully Matured Economy', (*Ec. H. R.*, 2nd ser., Vol. V, 1952).
- [41] Sella, D., 'The Rise and Fall of Venetian Woollen Industry', (in Pullan, B., (ed.), *Crisis and Change in Venetian Economy in the Sixteenth and Seventeenth Century*, 1968).
- [42] Rapp, R. T., 'The Unmaking of Mediterranean Trade Hegemony', (*The Journal of Economic History*, Vol. XXXV, 1975).
- [43] Wilson, C., 'Cloth Production and International Competition in the Seventeenth Century', (*Ec. H. R.*, 2nd ser., Vol. XIII, 1960).
- [44] Wee, H. Van Der, *The Growth of Antwerp Market and European Economy*, 3vols., (1963).
- [45] Houtte, J. A. Van, *An Economic History of the Low Countries, 800-1800*, (1977).
- [46] Zins, H., *Anglia a Bałtyk w drugiej połowie XVI wieku. Bałtycki handel kupców angielskich z Polska w epoce elżbietańskiej i Kompania Wschodnia*, (1967). [Stevens, H. C. (tr.), *England and the Baltic in the Elizabethan Era*, (1972)].
- [47] Lingelbach, W. E., 'Internal Organization of Merchant Adventurers of England', (*T. R. H. S.* 2nd ser., Vol. XVI, 1901).
- [48] Willan, T. S., 'Some Aspects of English Trade with the Levant in the Sixteenth Century', (*Eng. H. R.*, Vol. LXX, 1955).
- [49] ditto, *The Early History of Russia Company 1553-1603*, (1956).
- [50] Hinton, R. W. K., *The Eastland Trade and the Commonwealth in the Seventeenth Century*, (1959).
- [51] Brenner, R., 'The Social Basis of English Commercial Expansion 1550-1650', (*The Journal of Economic History*, Vol. XXXII, 1972).
- [52] Robert, R., *Chartered Companies and their Role in the Development of Overseas Trade*, (1969).

まず第一は、他の諸分野と不均等に毛織物輸出統計の分析のみが急速な進歩をとげたため、チューダーおよびステュアート前期の様々な局面での変化を専らそれとの関連で説明する傾向が強まったことであり、その意味では、Stone [28] の Fisher [15] に対する批判は傾聴に値するものであった。

第二に、輸出品構成の変化を国際的分業構造の変化から説明しようとする仮説が成立するためには、純経済的問題の範囲内においても、大陸における毛織物生産や需要や物価などの動向が広範に確定され得ることが実証的には必要である。また一方、そうした大陸の状況変化に対応し得たイングランド国内の対応過程の考察も不可欠である。

第三に、毛織物輸出趨勢の確定自体にも問題は存する。既述のように、チューダー期に比してステュアート前期の毛織物輸出統計は不十分であるが、これは輸出関税の全国的統計である Enrolled Customs Accounts が1604年までしか利用できず、それ以降は各港湾ごとの台帳である Exchequer Port Book に頼らざるを得ないため、と考えられる。近年の地方港研究の盛況はこうした史料上の背景があるといえよう。しかしながら、これらの個別地方港の研究を集積してゆくことによって全国的貿易趨勢の解明をおこないえる可能性は少ない。何故なら、Port Book の残存は時期的・場所的に極めて偏在し、また史料としての精度自体も低いからである。こうした史料の欠落部分を補う手段として、最近、操作的に仮定的近似値を算出

する方法が用いられるようになってきている。すなわち、Stephens [24] は、同一年次には全港湾について残存しない port books から同一年次の地方港総輸出量を算出するに際して、Supple [36] は、ステュアート初期の Enrolled Customs Accounts 欠落年度のロンドンからの輸出量を算出するに際して、それぞれそうした方法を用いている。しかしながら、それは Supple 自身も認めるように、あくまで 'statistical juggling' にすぎないのであり、その精度は必ずしも高いものとはいえない。さらに、少なくともチューダー後期以降においては smuggling の要因を考慮に入れば、Enrolled Customs Accounts が利用可能な時期に関しても、貿易趨勢を統計的に確定することは極めて困難であるといえよう。従って、貿易統計なしに貿易趨勢を確定することが不可能であったと同時に、貿易統計のみによって貿易趨勢を確定しようとする試みは限界に近づいていると結論せざるを得ない。

(2) 地域史研究

地域史的研究は、すでに「初期」にも V. C. H. Suffolk に寄稿した Unwin [7] や「後期」への過渡期に位置する Heaton [53] が存在したが、「後期」に入ると毛織物史研究の中心的位置を占め広範な地域がその対象となってきている。北部に関しては、Tupling [54]; Crump [55]; Wadsworth & Mann [56]; Lowe [57], 西部に関しては、Ramsay [58]; Perry [59]; Mendenhall [60]; Carus-Wilson [61];

- 注[53] Heaton, H., *The Yorkshire Woollen and Worsted Industries from the Earliest Times up to the Industrial Revolution*, (1920).
- [54] Tupling, G. H., *The Economic History of Rossendale*, (1927).
- [55] Crump, W. B., and Ghorbal, G., 'History of the Huddersfield Woollen Industry', (*Handbook of the Tolson Memorial Mus.*, Vol. IX, 1935).
- [56] Wadsworth, A. P., and Mann, J. de L., *The Cotton Trade and Industrial Lancashire, 1600-1780*, (1931).
- [57] Lowe, N., *The Lancashire Textile Industry in the Sixteenth Century*, (1972).
- [58] Ramsay, G. D., *The Wiltshire Woollen Industry in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*, (1943) [2nd ed. (1965)].
- [59] Perry, R., 'The Gloucestershire Woollen Industry, 1100-1690', (*Transaction of the Bristol and Gloucestershire Archaeological Society*, Vol. LXVI, 1947).
- [60] Mendenhall, T. C., *The Shrewsbury Drapers and the Welsh Trade in the XVIth and XVIIth Centuries*, (1953).
- [61] Carus-Wilson, E. M., 'The Woollen Industry before 1550', (in, Crittall, E., (ed.), *V. C. H. Wiltshire*, Vol. IV, 1959).
- [62] Mann, J. de L., 'Textile Industries since 1550', (in, Crittall, E., (ed.), *V. C. H. Wiltshire*, Vol. IV, 1959).
- [63] Tann, J., *Gloucestershire Woollen Mills*, (1967).

Mann [62]; Tann [63]; Mann [64], 東部に関しては, Pilgrim [65]; Allison [66]; Pilgrim [67] が相次いで出現し, 当時の三大毛織物生産地域全体をカバーするに至っており, また一方で, 「初期」とは考察視角や史料の利用などに関しても大きな変化がみられる。

①生産物構成の変化 テューダーおよびステュアート前期において, 輸出品構成の重心が半製品から完成品へと移行したことは既に述べたが, 同様な変化が生産に関しても進行していたことをこれら一連の地域史研究は解明してきている。しかし, この変化は主要な地域に関しても, 西部では未仕上 woollen から染色 woollen へ, 南東部・東部では woollen ないし worsted から New Draperies へ, 北部では変化なし (北部の一部では粗製 woollen から fustian ないし worsted へ) といった地域ごとに多様な進行速度や形態をとっており, イングランドの国際的分業構造上の地位の変化は同時にイングランド内部の地域間分業構造の変化と平行して進行していたことが明らかになった。

②生産組織

1) 「初期」の研究との比較。

生産組織の研究は最も著しい変化がみられた分野の一つである。その第一は, Probate Records 類の利用の増加という史料的側面に現われた変化である。すなわち, 「初期」に属する Unwin [7] は専ら法制史料に依存し, 「後期」への過渡期に位置する Heaton [53] も Probate Records を用いつつも基本的にはハリファックス条例などの法制史料に依存しているといえよう。これに対して「後期」の三大毛織物生産地域に関する代表的研究である西部の Ramsay [58], 東部の Allison [66], 北部の Lowe [57] はいずれも Probate Records を用いており, さらにこれらの内でも最近のものほどそれへの依存度は高まっており, Probate Records の分析が毛織物生産の全主要工程を包摂するようになる一方, その分析は単なる所有関係だけでなく信用関係にも及ぶに至っている。

第二のそしてより決定的変化は, 生産組織の考察視角の設定に関わる変化である。「初期」の研究者は程

度の差こそあれいずれもドイツ歴史学派の影響を受けていることは既に述べた通りであるが, 生産組織に関しても gild system → domestic system → factory system という発展段階説の全西ヨーロッパ地域への普遍妥当性に対する絶大な信頼が存在していた。すなわち, Heaton [53] はヨークシャーについて, まず中世後期における都市工業の衰退と農村工業の興隆を考察した上で, 中世における gild system と産業革命期の factory system の中間段階をテューダーおよびステュアート期のウェストライディングを中心とする農村工業の生産組織形態の内に求めるという考察視角を設定し, この時期のヨークシャーに最も特徴的な生産組織をハリファックス条例の前文にみられるような織元の家族的生産の内に求め, これをもって織元が専ら商業活動に従事するウィルトシャーなど西部とは異なる domestic system であったと規定している。また Lipson [10], [11] は, 北部に関しては Heaton [53] に, 西部に関してはいわゆる巨大織元の既存の研究に主として基づき, テューダーおよびステュアート前期を基本的には domestic system の段階とみなした上で, 北部をその第一段階, 西部をその第二段階であると位置づけている。すなわち西部の織元は entrepreneur であり, 生産者は織布工や仕上工であり, この組織形態こそが実際の生産者 (manual workers) が道具は所有するが原料は所有しないものとしての domestic system の典型であるとする一方, 北部における実際の生産者である織元が道具・原料ともに所有する生産組織は, gild organization なき gild system である, と規定している。

これに対し, 「後期」の一連の地域史研究からは, テューダーおよびステュアート前期のイングランド毛織物工業の生産組織の内に domestic system の検出を試みる, という問題設定は実質上消失している。Coleman [68] は歴史学派的発展段階説自体に生産組織の段階類型としての様々な不十分さが存すると指摘している。しかしそれと同時に, あるいはそれ以上に, 19世紀ドイツに固有の実践的課題と結びつき, またド

注[64] Mann, J. de L., *The Cloth Industry in the West of England from 1640 to 1880*, (1971).

[65] Pilgrim, J. E., 'The Rise of the "New Draperies" in Essex', (*University of Birmingham Historical Journal*, Vol. VII, 1959).

[66] Allison, K. J., 'The Norfolk Worstéd Industry in the Sixteenth and Seventeenth Centuries', (*Yorkshire Bulletin of Economic and Social Research*, Vols. XII, 1960 & XIII, 1961).

[67] Pilgrim, J. E., 'The Cloth Industry in East Anglia', (in, Jenkins, J. G., (ed.), *The Wool Textile Industry in Great Britain*, 1972).

[68] Coleman, D. C., *The Domestic System in Industry*, (1960).

イツを中心とする大陸の史実を概念設定の基礎とする歴史学派発展段階説を、そうした実践的関心と無関連に大陸的な意味での中世都市の発展の極めて微弱であったイングランドに適用することの無意味さと困難さが指摘されねばならない。Lipson [11] による北部の織元の規定などは、こうした限界性を典型的に示している。

2) 主要生産地域の代表的研究。

三大毛織物生産地についての「後期」における代表的研究を概観する。

西部に関しては、その最大の中心地であるウィルトシャーに関する Ramsay [58] が代表的研究である。彼は、半製品 white broad cloth 生産が支配的であるテューダー期、Spanish cloth などの完成品生産への移行期であるステュアート初期、後者の生産が本格化するステュアート後期、という主要生産物の変化に伴う時期区分を設定し、テューダー期には特殊な巨大織元が出現する一方、基本的には多数の織機を所有する大織元層と industrial proletariat とによる生産組織と並んで、自己の織機を所有する擬似独立 (quasi independent) な織布工などによる生産組織とが併存するとし、前者の生産組織が支配的となるのはステュアート後期であるとしている。こうした考察に立って、西部と北部の相違は、テューダー期にはその萌芽がみられるにすぎないとみなしている。しかしながら、彼の研究には次のような問題点が存在する。その第一は、彼の Probate Records の分析は生産用具の所有関係に限定されており、原料・製品の所有関係やそれらの信用関係に分析が及んでおらず、quasi の意味が不明確である点である。その第二は、彼自身が明らかにしたように、西部においては半製品生産の最終工程である縮絨 (fulling) 工程までにすべての半製品は大織元の所有に帰するという史実を考慮に入れるならば、西部の quasi independent な織布工などに対する大織元の関係は、北部にも存在したリーズの大織元のそれとは異なるものとみなさなくてはならないという点である。

東部に関しては、ノーフォークに関する Allison [66] が代表的研究である。彼も New Draperies 導入直後の基本的には旧 worsted 生産が中心であったテューダー末期からステュアート前期にかけての時期と、New Draperies の生産が本格化したステュアート後

期、という主要生産物の変化に伴う時期区分を設定して考察しており、前者においては independent master craftsman による小規模生産組織が支配的であることを、後者においてはすでに「初期」においても master comber の活動との関連で知られていた紡糸工程における putting-out system や原料・製品・織機の所有に関して両極分解がみられることを解明した。Allison の研究は、「初期」にはほとんど不明であった東部の生産組織の解明を試みた点や、都市と農村の間の生産組織の質的相違の有無を解明しようとした点など画期的な側面をもつ反面、大量の inventories を用い、その平均的層の生産組織をもって支配的なものとみなす点や原料・製品の stock を所有せぬ層を直ちに independent と解釈している点などには問題を残している。

北部に関しては、ランカシャーについての Lowe [57] の研究がある。彼自身は粗製 woollen が主要生産物であったテューダー期を主要考察対象としており、fustian や worsted が導入されるステュアート期に関しては Wadsworth & Mann [56] に依拠しているが、生産組織の変化を主要生産物の変化との関連で考察している点は Ramsay [58] や Allison [66] と同様である。すなわち、テューダー期には独立の小織元・織布工による生産が圧倒的であり、大織元の支配が強まるのはステュアート後期であるとしている。Lowe の特徴の第一は、織機などの生産用具は低価格であり、またその所有数と移動数は必ずしも一致しない点を指摘し、原料・製品を所有する生産者をもって独立の生産者とみなしていることである。さらに、原料・製品の stock までは既に Allison の段階でも分析対象とされていたが、その信用関係にも独特の解釈を示した点に Lowe の第二の特徴がある。すなわち、織元と織布工の間に信用関係が成立することは両者が独立の所有主体であることを意味し、従ってそれが原料・製品に伴う信用関係であっても両者に信用関係が成立し得る限りは putting-out system の前貸とは区別されるべきであるとしている。この問題は、その信用関係の実質が inventory だけからは判断しえないため、その解釈如何では Lowe が生産者的織元とみなした織元を問屋制前貸商人とする見解 Bagley [69] も可能となりえた。

③ 成果と課題 地域史研究の進展は、テューダーお

注[69] Bagley, J. J., 'Matthew Markland, a Wigan Mercer: the Manufacture and Sale of Lancashire Textiles in the Reign of Elizabeth I and James I', (*Lancashire and Cheshire Antiquarian Society*, Vol. LXVIII, 1958).

よびステュアート期において生産物構成の重心移動が各地域において多様な形態をとって進行したことを解明した。かくして、生産組織の考察は、イングランド各毛織物生産地域に則する新たな時期区分のメルクマールを与えられることになり、歴史学派の影響下において、gild system から domestic system への移行としてとらえた生産組織の段階変化を、中世末以来のイングランド毛織物工業の都市工業から農村工業への移行過程の内に検出しようとする問題設定は後退し、代って生産物構成の変化との関連で生産組織の変化を考察するという視角が導入された。一方史料の側面では、「初期」における法制史料の地位は、County Record Offices などに保存されている Probate Records によって取って代わられた。

これらの変化は、一面では生産組織の実態によりせまるものであった反面、様々な問題点も生起させた。すなわち、時期区分の基準の変化は、テューダーおよびステュアート期イングランドの史実により適合的な時期区分を設定することを可能にさせ、「初期」における歴史学派発展段階説をイングランドに適用することに伴う既述の問題点を解消させた反面、「初期」の段階区分がもつ時間間比較基準の多面性をも失なわせることになった。この傾向は「後期」に属する研究のうちでも最近のもの程強くなっており、生産組織の変化を歴史の他の局面との関連でとらえることを次第に困難にさせている。

一方、史料の利用に関しても同様な問題が存在する。Probate Records の利用方法に関する問題点は各研究者ごとに既に述べたので、ここではその利用自体の問題点を指摘しておく。まず、Probate Records 類は一定時期の法形式上の所有関係のみを反映しているにすぎないという問題がある。従って、「初期」以来利用されてきた法制史料（特に裁判関係）や会計簿類との併用が要請されるが、後者は Coward [70]; Kennett [71] といった特殊な史料を除いては、現状では利用が困難である。また、Probate Records 類は個別経営の状態のみを反映しているにすぎないという問題があり、先の時期区分基準の変化と相俟って、生産組織の特質を規定する要因のうち、個別経営史料に反映されない要因を軽視させる傾向を強めている。さらに

Probate Records 類の内、特に Inventory に関しては以下のような問題点を指摘しうる。まず第一に、Inventory に反映されうる所有関係は動産のみであるという点である。土地所有関係が反映されないことは、とりわけ農村工業の考察などの際に重大な障害となり、可能な場合には（毛織物生産者が tenant in chief（直接受封者）である場合には）、Inquisition post mortem（死後審問集）や（1540年以降すなわち不動産遺言法成立以降の場合には）will との併用が望ましいが、実際には困難であろう。第二に、検認が diocese 以下の court で行なわれなかった者、すなわち一般的には最上層の生産者の Inventory は、County Record Offices などではなく Somerset House に保管されているが、これまた現状では利用が極めて困難であることがしばしば指摘されている（例えば Hoskins, W. G., *Local History in England*, p. 101.）。第三に、Inventory を残す層は、単に全生産者の一部であるだけでなく、特定の部分（中層以上）であるという問題がある。従って、Inventory のみをもって一定の地域ないし生産部門の生産組織の支配的形態を確定する方法には限界があるといえる。

こうした問題のうち、かなりの部分は本稿〔Ⅱ〕-〔3〕や〔Ⅲ〕で扱う分野の研究によって用いられる史料に反映されうる要因によって補いうるもので、それらとの照合が要請される。また、そのことを通じて、「後期」の毛織物業史の時期区分の基準も他の歴史局面との関連を回復することが可能となるであろう。

(3)その他の諸問題

①国内流通 一連の地域史研究の成果から予測されるこの時期の国内地域間分業構造の変化を確定するためには、地域ごと、生産物ごとの生産量（ないし国内消費量）の推移や国内の流通構造が解明されなければならない。基本的には外国貿易と同様に考察しうる沿岸流通の問題を除けば、これらは主として毛織物検査関係の史料によって研究が進められてきている。しかしながら、これらの問題は依然として未解明な部分が多い。

生産量に関しては、すでに「初期」において、[a] ulnage（販売用毛織物の検査料）統計を用いて都市と農村の生産量を比較した Heaton [53] の試みが存在した。

注[70] Coward, E., 'William Gaby, His Book, 1656', (*Wiltshire Archaeological and Natural History Magazine*, Vol. VI, 1933).

[71] Kennett, D. H., 'A Pauper Cloth-Making Account of the Seventeenth Century', (*Textile History*, Vol. IV, 1973).

しかし、ulnage 統計は形骸化・固定化の傾向が著しく、特定の年度を除いてはオリジナルでない、という Carus-Wilson [72] による批判があり、この方法での生産量の時系列的確定は困難である。また、生産量の確定のためではないが、Thirsk [73] も ulnage を史料として用いている。輸出品構成の変化は、イングランド各地の生産物構成の多様性を反映し得ないことは既に述べたが、それはまた、国内市場向生産物の動向も反映し得ない。Thirsk [73] によれば、靴下編工業はそうした生産物を生産する代表的工業であり、従来農村的副業として行なわれていた靴下編工業は、テューダー後期以降急速かつ広範に国内市場で重要性を高めるに至った。

国内流通の問題のうち、沿岸流通に関しては、外国貿易と同様 Exchequer Port Book を利用することが可能である。Willan [74] は、17世紀の段階では、沿岸取引は国内消費のためではなく輸出の一環をなしていたこと、また東南海岸と西海岸とでは程度の差はあるが、仕向地がロンドンへ集中していたこと、などを明らかにした。Ramsay [75]; Williams [76]; Jones [77] の諸研究は、いずれも Blackwell Hall や地方都市の毛織物検査場における不良品の摘発や検査料の統計を提示しており、国内流通構造の実態の一部を解明したものである。しかし、この時期の内陸取引の発達、公的市場取引によるよりも私的個人間取引によるものであったという Everitt [78] の指摘にもかかわらず、後者が上述の諸研究の用いたような史料に反映される可能性は極めて少ない。その意味では、Willan [79] はその間隙を埋めうるものであったが、主として既存の case studies に基づいているため、地域的偏差が激しく、毛織物取引にとって最も重要な

いくつかの地域が欠落している。従って、かつて Carus-Wilson [61] によって分析された個別商人の memorandum の利用や、非合法取引の規制状態を反映する Court of Request 関係の史料のより一層の利用が要請される一方、後述の新たな都市史の成果との照合も必要となるであろう。

Bowden [80] は、かの1615年の Merchant Staplers の請願書 (S. P. D., James I, Vol. LXXX, 13) に基づいて、国内の羊毛取引・毛織物取引およびそれらに伴う商業信用関係の類型化を試みたものである。Tawney [81] は、より広範な信用関係を、貧困小所有層や没落 gentry から産業や土地への投資家へという借手の変化を中心に扱っている。

②規制政策 既述の毛織物貿易政策の他、この時期の毛織物に関する経済政策としては、テューダー中期以降の一連の規制政策が重要な考察対象となっており、それらの集大成ともいえるいわゆる徒弟法 (5 Eliz. c. IV) を中心に研究が進められてきている。

「初期」においては Cunningham [4] や Unwin [6] などによって、主として政策意図をめぐる研究が進められ、既存の地域・産業別立法の国民的統一及び都市一手工業、農村―農業体制の維持を意図したものであるという位置づけがなされた。この位置づけは、テューダー期を都市経済→国民経済、gild system→domestic system の移行期としてとらえ、経済政策を自由な経済活動の発展に対する保守的規制にすぎない、ととらえる Unwin [6] の歴史観に立てば当然のものといえよう。しかし、今そのことの是非を問いただすとしても、「初期」の研究者に散見される法律の条文の解釈からその政策意図を析出しようとした方法のもつ限界は、指摘されなくてはならないであ

注[72] Carus-Wilson, E. M., 'The Aulnage Accounts: A Criticism', (*Ec. H. R.*, Vol. II, 1929).

[73] Thirsk, J., 'The Fantastical Folly of Fashion: the English Stocking Knitting Industry, 1500-1700', (in, Harte, N. B., and Ponting, K. G., (eds.), *Textile History and Economic History*, 1973).

[74] Willan, T. S., *The English Coasting Trade 1600-1750*, (1938).

[75] Ramsay, G. D., 'The Distribution of Cloth Industry in 1561-2', (*Eng. H. R.*, Vol. LVII, 1942).

[76] Williams, N. J., 'Two Documents Concerning the New Draperies', (*Ec. H. R.*, Vol. IV, 1952).

[77] Jones, D. W., 'The "Hallage" Receipts of London Cloth Markets, 1562-c.1720', (*Ec. H. R.*, 2nd ser., Vol. XXV, 1972).

[78] Everitt, A., 'The Marketing of Agricultural Produce', (in, Thirsk, J., (ed.), *The Agrarian History of England and Wales*, Vol. IV, 1500-1640, 1967).

[79] Willan, T. S., *The Inland Trade*, (1976).

[80] Bowden, P. J., 'The Home Market in Wool, 1500-1700', (*Yorkshire Bulletin of Economic and Social Research*, Vol. VIII, 1956).

[81] Tawney, R. H., *An Historical Introduction to A Discourse upon Usury by Thomas Wilson*, (1925).

ろう。何故なら、法律の実質的な政策意図やさらには歴史的意義は、その条文自体と同時に、その成立過程や実施過程の考察によって解明されうるからである。しかし、その成立過程の考察は、Bindoff [82] などでは追求されているものの、基本的には史料の限界により研究が進んでおらず、以下では実施過程の研究を概観する。

徒弟法の二大構成要素のうち、賃銀規制に関しては早くから研究があり、Tawney [83] はその実施過程の分析により、規制の効果を過少評価するCunningham [4] などの通説を批判する一方、毛織物工業については最低賃銀規制として毛織物工業以外の産業については農業も含めて最高賃銀規制として実施されたことに着目し、Rogers [84] 以来の賃銀抑圧の側面を一面的に強調する通説に対する批判も行なっている。

これに対し、徒弟規制の実施過程に関しては、主として Civil War 以降の都市における状況を考察したDunlop & Denman [85] が比較的早い時期に現われたが、農村も含めた実施状況は、Gay [86-a]; Davies [86-b] により解明されつつある。Davies (旧姓 Gay) の二つの研究は、いずれも史料的には西部の毛織物工業地域における徒弟法などの一連の規制法に対する違反の告発 (information) 記録に基づき、デヴォンシャーから西部サマセットシャーにかけての小幅織物地域とウィルトシャーから東部サマセットシャーにかけての末仕上広幅織物地域とにおける告発数の趨勢の相違を明らかにしたものである。しかし、前書 [86-a] においては、その相違を基礎に、政策の実施過程と同時に成立過程背後の利害対立の析出を試みているのに対し、

後書 [86-b] においては、その相違と両地域の輸出趨勢の相違との関連の解明を試みており、まさに「初期」と「後期」の研究動向の相違を同一の研究者が象徴的に表現している。また、Beresford [87] も common informers (民間刑事告発人) による告発を扱っており、告発対象別の時系列分析とステュアート初期のこの制度に関する論争の分析を通じて、テューダー中期から1624年の間に特にそれが経済法の強制手段及び間接税の徴収手段として用いられた点を強調している。以上のように告発に関する一連の研究は、様々な部面で成果をあげてきているが、これらの研究における限界は、告発数が直ちにその地域ないし産業における立法の強制力の指標とならないことである。何故なら、告発の数自体は、規制法が守られていたから告発数が少ないのか、告発数が少ないことが守られていなかったことを意味するのか、を明らかにしえないからである。

規制政策のうち、原料羊毛に関しては、Bowden [88] の研究が存する。羊毛の国内流通の担い手を一定の層に限定した羊毛売買時期制限法の制定 (1552年) から、羊毛輸出禁止 (1614年)、Merchant Staplersの国内流通特権の喪失 (1615年)、その特権の一時的回復を経て、最終的に羊毛売買自由化法案が可決される (1624年) までの過程を、毛織物工業の発展に伴う、Merchant Staplers, 下院に結集する地主層および違法摘発権の Patentee 相互の利害関係の推移との関連で扱っている。

③特殊織元 特定の個別織元に関する研究は古くから存在し、「初期」には Deloney [89]; Manley [90]; McClenaghan [91] といった、いわゆる巨大織元を扱

- 注[82] Bindoff, S. T., 'The Making of the Statute of Artificers', (in Bindoff and others (eds.), *Elizabethan Government and Society*, 1961).
- [83] Tawney, R. H., 'The Assessment of Wages in England by Justices of the Peace', (*Vierteljahrschrift für Sozial-und Wirtschafts-geschichte*, Bd. XI, 1913).
- [84] Rogers, J. E. T., *A History of Agricultural and Price in England*, 7vols., (1882-1902).
- [85] Dunlop, O. J., and Denman, R. D., *English Apprenticeship and Child Labour*, (1912).
- [86-a] Gay, M. R., 'Aspects of Elizabethan Apprenticeship', (in *Facts and Factors in Economic History: Articles by former Students of Edwin Francis Gay*, 1932).
- [86-b] Davies, M. G., 'The Enforcement of English Apprenticeship: A Study in Applied Mercantilism, 1563-1642', (*Harvard Economic Studies*, Vol. XCVII, (1956)).
- [87] Beresford, M. W., 'The Common Informer, The Penal Statutes and Economic Regulation', (*Ec. H. R.*, 2nd ser., 1957).
- [88] Bowden, P. J., *The Wool Trade in Tudor and Stuart England*, (1962).
- [89] Deloney, T., 'The Pleasant History of Jack of Newbury', Mann, F. O., (ed.), *Works*, (1912).
- [90] Manley, F. H., 'William Stumpe of Malmesbury, His Desendants and Relatives', (*Wiltshire Notes and Queries*, Vol. VIII, 1916).
- [91] McClenaghan, B., *The Springs of Lavenham and the Suffolk Cloth Trade in the XVth and XVIth Centuries*, (1924).

った史料や研究が現われた。「後期」では Moir [92] 西部における染色 woollen 生産の導入者の一人であった Webb を扱っている。

④生産技術 Industrial Archaeology の成果も取り入れ、毛織物技術史を集大成したものとしては Jenkins [93] があり、また技術史的傾向の強い地域史としては Tann [63]; Ponting [94] があるが、いずれも考察の中心は産業革命前後にある。また生産物構成の変化との関連を扱ったものとしては、Lemon [95]; Coleman [96] があり、前者は生産物構成の変化と紡糸技術の改良との関係を、後者は New Draperies の技術的起源を、南欧とイングランド伝来の農村工業双方の技術的発展の結合に見い出さなくてはならない点を、それぞれ指摘している。

〔Ⅲ〕 関 連 分 野

既述の地域史研究が個別経営の生産組織に考察の重心を移しつつある現在、単なる個別経営の集合体とは区別される地域経済構造の考察は、〔Ⅱ〕(3)で概観した国内流通の研究と並んで都市史および農村・農業史の研究において進行している。そこで、最後にこれらの分野の諸研究をそうした関連で概観する。

①都市史 「初期」の都市史は、まさに borough と gild company との歴史であり、それらの charters 類や個々の Company Records を基礎に研究が進め

られた。Weinbaum [97]; Johnson [98] などによるそれらの編纂や、Gross [99] などによるその起源の追求や、Consitt [100] に代表される個別 Company を扱ったものなどが典型的なものであり、また Unwin [101]; Unwin [6]; Consitt [100]; Krammer [102]; Fisher [103] などにみられる、イギリス史における voluntary association としての gild の歴史的役割を問うこと、とりわけ既述の発展段階説との関連で、テューダーおよびステュアート期にその存在意義を失ないつつあった gild 再編策や変質過程を問うことが、最も有力な研究視角であった。「後期」においてもこうしたタイプの研究は進展しており、Beresford [104] による史料編纂、Plummer [105] による個別 Company の研究、Palliser [106] による gild 間の併合過程に関する Krammer [102] 説の批判などが、その代表的なものといえる。また Ramsay [107] は、既述の Alderman Cockayne's Project に収斂してゆく諸対立の内、ロンドンの仕上工・仕上品輸出業者と Merchant Adventurers とのテューダー後期における対立過程を、主に Company Records に基づいて考察している。

しかし、「後期」にはこれらと異なる研究視角からの都市史が現われた。それは muster roll (軍役適格者名簿)、Subsidy returns (特別臨時課税簿) や freemen's register (自由市民登録簿) といった史料を用い、一定地域の職業構成を検討することにより、都市内部

注[92] Moir, E., 'Benedict Webb Clothier', (*Ec. H. R.*, 2nd ser., Vol. X, 1957).

[93] Jenkins, J. G., (ed.), *The Wool Textile Industry in Great Britain*, (1972).

[94] Ponting, K. G., *The Woollen Industry of South West England*, (1971).

[95] Lemon, H., 'The Developement of Hand Spinning Wheels', (*Textile History*, Vol. I, 1968).

[96] Coleman, D. C., 'An Innovation and Its Diffusion: the "New Draperies"', (*Ec. H. R.*, 2nd ser., Vol. XXII, 1969).

[97] Weinbaum, M., *British Borough Charters, 1307-1660*, (1943).

[98] Johnson, A. H., *The History of Worshipful Company of the Drapers of London*, 5vols., (1914-22).

[99] Gross, C., *The Gild Merchant: A Contribution to British Municipal History*, 2vols., (1890).

[100] Consitt, F., *The London Weavers' Company*, (1933).

[101] Unwin, *The Gilds and Companies of London*, (1908).

[102] Krammer, S., *The English Craft Gilds, Studies in their Progress and Decline*, (1927).

[103] Fisher, F. J., 'Some Experiments in Company Organization in the Early Seventeenth Century', (*Ec. H. R.*, Vol. IV, 1933).

[104] Beresford, M. W. & Finberg, H. P. R., *English Medieval Boroughs, A Hand-List*, (1973).

[105] Plummer, A., *The London Weavers' Company 1600-1970*, (1972).

[106] Palliser, D. M., 'The Trade Gilds of Tudor York', (in, Clark, P. & Slack, P., (eds.), *Crisis and Order in English Towns*, 1972).

[107] Ramsay, G. D., 'Clothworkers, Merchant Adventurers and Richard Hakluyt', (*Eng. H. R.*, Vol. 92, 1977).

や都市周辺地域の経済構造・社会構造を考察しようとするものである。muster rollの分析は、既にTawney & Tawney [108] や Perry [59] によってなされ、ステュアート初期のグロスターシャーについて、かなりの割合の非農業人口の存在、地域特化の進行、階層分化の程度の低さ、などが指摘されていた。その後、こうした手法が都市史にも適用されるに至った。こうした方向を目差した都市史は、subsidy returns 額による諸都市間の比較とともに、muster roll・subsidy returns・freemen's registersなどに現われた Midlands の三都市の職業構成の比較を通じて、諸都市の経済・社会構造の比較を試みた Hoskins [109] により先鞭をつけられ、バッキンガムシャー、ラットランドおよびサセックスの諸都市の subsidy lists を用いて都市内の階層分化を考察した Cornwall [110] などによりこの傾向は定着し、最近、ロンドン市の registers and admission books of freemen と City muster-roll of householders を分析し、市民の出身地域・階層及び所属諸 Companies の盛衰などを考察した Ramsay [111] が現われた。その他、多くの地域に関して、この種の研究が存在するが、主要毛織物生産地域に関しては、以下のような研究が存在する。Pound [112] はテューダー期ノリッジの subsidy roll と city's register of freemen に現われた同市の職業構成の変化が、同市の worsted 工業の盛衰と密接に関連していることを解明した。また Patten [113] はサフォークの染色織物地域の Hundred of Harnes を用い、Hundred 内の都市以下の様々なレベルの居住地 (settlement) の職業構成を分析することにより、Everitt [78] の強調する私的個人間取引 (Free Trading between Individuals) の実

態の検証を試みている。

こうしたタイプの(広義の)都市史は、既述の生産組織や国内流通の研究と結合される時、大きな成果をもたらす可能性がある。しかし、そこにはなおいくつかの問題点も指摘しうる。第一は、subsidy returns や muster roll といった史料は残存地域が極めて偏在しており、今後主要毛織物工業地域に関してそれらが利用し得るようになる可能性が少ない、ということである。第二に、そうした残存状況において偶然利用可能となった史料のカバーしうる地域の範囲が、地域構造検出に有効な範囲である保障はなく、その当否はその史料だけでは判断し得ないため、Patten [113] のような研究の結論は蓋然的であらざるを得ない。第三に、Tawney & Tawney [108] による史料批判以来しばしば論議的となってきた、史料上との職業と実際上の経済活動との乖離という問題があり、兼業形態が一般的であったテューダーおよびステュアート前期の考察にとつては、社会的分業の実態が過少にしか反映されない点などに、これらの史料の限界性が存する。

②農村・農業史 この分野においても新たな傾向が現出してきている。「初期」においては manor 構造や tenure 構成に集中していた研究対象が、農村の社会経済構造や、土地・農業制度の変化に伴う農業活動の変化などにも拡大されてきている。

こうしたタイプの農村・農業史の成果の第一は、すでに19世紀初頭の T. Davis や A. Young などの議会報告書('General View of the Agriculture')などにおいても、素朴な形で意識されていた土壌と農業経営などの対応関係を基礎に、広範な類型化を行なった Allison [114]; Thirsk [115]; ditto [116] などによるものである。これらのうち、Thirsk [116] は、その対象が

注[108] Tawney, A. J., & Tawney, R. H., 'An Occupational Census of the Seventeenth Century', (*Ec. H. R.* Vol. V, 1934).

[109] Hoskins, W. G., 'English Provincial Towns in the 16th Century', (*T. R. H. S.*, 5th ser., Vol. VI, 1956).

[110] Cornwall, J., 'English Country Towns in the Fifteen Twenties', (*Ec. H. R.*, 2nd ser., Vol. XV, 1962).

[111] Ramsay, G. D., 'The Recruitment and Fortunes of Some London Freemen in the Mid-Sixteenth Century', (*Ec. H. R.*, 2nd ser., Vol. XXXI, 1978).

[112] Pound, J. F., 'The Social and Trade Structure of Norwich, 1525-1575', (*P. & P.*, No. 34, 1966).

[113] Patten, J., 'Village and Town: an Occupational Study', (*Ag. H. R.*, Vol. 20, 1972).

[114] Allison, K. J., 'The Sheep-Corn Husbandry of Norfolk in the Sixteenth and Seventeenth Century', (*Ag. H. R.*, Vol. 5, 1957).

[115] Thirsk, J., 'Industries in the Countryside', (in, Fisher, F. J., (ed.), *Essays in the Economic and Social History of Tudor and Stuart England*, 1961).

[116] ditto, 'The Farming Regions of England', (in, Thirsk, J., (ed.), *The Agrarian History of England and Wales*, Vol. IV, 1500-1640, 1967).

全国的であり、考察視角も土壌・生産物・耕地制度・マナー構造・村落構造・相続慣習・社会意識など、多局面にわたる最も野心的な類型化を試みたものである。毛織物工業との関連でとりわけ重要なのは、pasture farming・散村・マナ組織の脆弱さ、分割相続などの特徴を有する諸地域においては副業的工業が展開され、それらの地域に特殊な地下資源が存在しない場合には、毛織物工業が農村の副業の主要な形態となることを解明したことである。こうして、すでにランカシャーについて Wadsworth & Mann [56] や Tupling [54] によって明らかにされていた農業類型と毛織物工業の関係が、Thirsk によって全国的史実を基礎に主張されるに至った。

農業史研究の毛織物工業史研究への貢献の第二の側面は、既述の毛織物生産物構成の変化と農産物構成の変化との関連の解明である。Bowden[117]; ditto[88]; Kerridge [118] は、その起源をエンクロージャーに求めるか 'up and down husbandry' (一種の穀草農法) の採用に求めるかという相違を別とすれば、いずれも農業上の変化が羊のタイプの変化を通じて羊毛の質の変化をもたらしたとし、これらの変化がテューダーおよびステュアート期の毛織物生産物構成の変化を促進したと主張している。また Kerridge [118] と Bettey [119] は、この時期の染料作物栽培の発展と染色織物生産の関連を指摘している。

以上の関連分野の概観は、毛織物史研究にとってこれらの関連分野との総合的研究が不可欠であることを

示している。「初期」にみられた全国的な総合化は現在では不可能であるとしても、Chalklin [120]; Spufford [121] によってなされた広義の社会史の領域をも含む高水準の地域史的総合が、主要毛織物生産地域についても追求されることが不可欠となるであろう。

貿易商人であり財務府長官でもあった Cranfield に関する豊富な史料を基礎に、彼の生涯を時代の諸領域に亘るフレームワークの内に描くことにより、彼個人の盛衰を通じて時代自体にも光を当てることを試みた Tawney [122] は、上述の地域史とは別の方向で「後期」の研究のもつ限界性の克服を試みたものであるといえよう。Tawney [122] の不評が、より豊富な史料 (Sackville 文書の未刊行部分など) に基づき Cranfield の生涯自体としてはより優れた研究である Prestwich [123] の出現によるだけではないとしたら、それは Tawney [122] における方法自体に対するより一般的な反発によるものであろう (Winter, J. M., 'Tawney the Historian' in, Winter, J. M., ed., History and Society, Essays by R. H. Tawney, 1978, 参照)。「唯一の適切な歴史は総合史 (l'histoire intégrale) である。」(トニー) なる警句は、既に、「後期」の諸特徴が顕著になりつつあった1930年代におけるものであった。

〔付記〕 本稿は、続稿「テューダー・ステュアート期ウィルトシャーの毛織物工業」の序論をなすものである。なお、本稿の作成に当って、中村勝己教授から有益なコメントを得た。記して感謝の意を表したい。

(慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程)

- 注[117] Bowden, P. J., 'Wool Supply and the Woollen Industry', (*Ec. H. R.*, 2nd ser., Vol. IX, 1956).
 [118] Kerridge, E., 'Wool Growing and Wool Textiles in Medieval and Early Modern Times', (in, Jenkins, J. G., (ed.), *The Wool Textile Industry in Great Britain*, 1972).
 [119] Bettey, J. H., 'Cultivation of Woad in the Salisbury Area during the Late Sixteenth and Seventeenth Centuries', (*Textile History*, Vol. 9, 1978).
 [120] Chalklin, C. W., *Seventeenth Century Kent: A Social and Economic History*, (1965).
 [121] Spufford, M., *Contrasting Communities: English Villagers in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*, (1974).
 [122] Tawney, R. H., *Business and Politics under James I: Lionel Cranfield as Merchant and Minister*, (1958).
 [123] Prestwich, M., *Cranfield: Politics and Profits under the Early Stuarts, the Career of Lionel Cranfield, Earl of Middlesex*, (1966).